「夏休みの新聞日記」

伊勢丘小学校　５年　深川　智貴

表具師が小じわ一つない金びょうぶを仕立てる。ふすま絵のレプリカも並ぶ

備後の百年企業

8/2

泰山堂

高精細の模写びょうぶ

＝福山市多治米町

表具師が畳半畳ほどの金箔紙と向き合う。のりとはけを使って型枠に貼り、びょうぶを仕立てる。表面には小じわ一つない。

印鑑や指し物を作る職人だった初代が表具師に転じ、明治期の1887年に福山市城見町で始めた。

1980年代、ふすまのない洋風住宅が増え始め、経営は行き詰まった。当時社長だった山路三郎さん(76)は「何かを変えなければ」。経験のないびょうぶの量産を始めた。「とにかくもがいた」。失敗作がトラック1台分になるほど試作を重ね、腕を磨いた。バブル期のホテル建設ラッシュを背景に一時は全国の宴会場付きホテルの半分以上に納入した。

やがてバブルが過ぎ、注文量は3分の1に。「売るには付加価値が必要」。99年に社長を継いだ長男の宜嗣さん(49)がたどり着いたのは、寺社などが所蔵する表具を撮影して和紙に印刷する「レプリカびょうぶ」。墨汁や色あせまで実物そっくりに仕上げる。

これまでに建仁寺（京都市）の国宝「風神雷神図屏風」などを手がけた。絵師の模写より納期もコストも勝り、新たな需要を掘り起こした。

技術の進歩で20年前にはできなかった金箔への高精細な印刷ができるようになった。宜嗣さんは「きらびやかな寝室に一時は全国の海外でも売れる可能性は広がった。培った伝統で勝負を挑む」（井上貴博、写真も）

夕日を浴びて輝く芦田川

暮れゆくごと輝き増す川面　福山の芦田川

8/23

風光eye

赤く染まった街を縫うように、光輝く筋が蛇行している。福山市を流れる芦田川を駅家町上山守地区の山から見下ろした。日が傾いた夕暮れ時、まだ強烈な真夏の日差しが反射し、川面だけが浮かび上がった。

川にはいくつもの橋が架かり、家路につく車が列をなす。沈下橋の上には夫の散歩をしている人や買い物袋をかごに積んだバイクの姿。流域の人々の営みを映し出していた。

暮れゆくごとに川面は輝きを増す。街は青く変わり、明かりがともり始めた。毎年撮影に訪れるという高田町の光成良秀さん(71)が「山の向こうに太陽が消えてからも美しい」と話す。その言葉通り、川面は空の色を映して紫に。それはほんの数分で黒く変わった。（井上貴博、写真も）

夕治米町でつくったびょうぶは、ががやく金色でぼくにはできない伝とう的な方法でつくられているのだなあと思った。

夕くれの芦田川を見下ろすときれいだ。白く光る水面に、橋のかげが直線に見える。それはまるで筆でかいた一本の線のようだ。

ぼくは夏休みのあいた時間を使って新聞日記を書きました。

自分の好きな記事を選ぶことでやる気が出ました。